

博士論文 概要書

# 奥宮慥斎の研究

—明治時代を中心にして—

Research of Okunomiya Zosai

—mainly in Meiji Era—

早稲田大学大学院社会科学研究科  
地球社会論専攻 日本研究・日本歴史論

杉山 剛

## 1 本論文の目的および構成

本論文は明治時代を中心にした奥宮慥齋の研究である。明治以降の事績をたどり、併せてその考え（思想）についても考察した。

慥齋の研究については、各種事典（辞典）類に多数掲載されている割には殆ど本格的な研究はされていない。一般にも知られていない。比較的知られる所では、慥齋の名前は『自由党史』に一箇所だけ登場する。即ち

稱して幸福安全社と云ふ。福井縣人蒔田魯之を管し、而して由利は 其郷人小笠原某等數名を誘ふて來り、小室は井上高格等を誘ふて來り、其他松山の長屋忠明、土佐の福岡孝弟、奥宮慥齋、坂崎斌等加盟する者多し。因て之を團結して愛國公黨なる一政黨を組織す。というように愛國公黨に参加した一人として書かれてあるだけである。大久保利謙氏は小論「愛國公黨結成に関する史料—奥宮慥齋の日記から—」（『日本歴史』第488号、吉川弘文館、1989年）の中で、慥齋については、板垣との関係や、その他の動向が分からないとしている。そこで本論ではこのような点にも留意しつつ、比較的史料の多い明治期を中心にすることにした。明治維新以降

①高知藩において慥齋は何をしたのか、

②教部省において慥齋は何をしたのか、

③慥齋と、禅および自由民権家との関係は如何なるものであるのか、

の三点を中心に研究を進めることにした。よって本論文の構成を第1部「奥宮慥齋と高知藩」（第1、2、3章）、第2部「奥宮慥齋と教部省」（第4、5章）、第3部「奥宮慥齋と禅」（第6、7章）とした。

## 2 各章の概要

### 第1部「奥宮慥齋と高知藩」

**第1章**では、慥齋は高知藩で藩政に深く関わっていたことを示した。その初めは、明治3年1月に諭俗司都教に任命されたことであった。明治3年3月から4月にかけて高知西部地方を巡回し、王政復古とキリスト教防御を説いた。高知では明治3年12月に「人民平均の理」諭告が発せられ、慥齋はその翌年の3月から4月にかけては、東部地方を巡回した。そのときに説いたものは自由平等の考えに基づく「諭俗 人間靈魂自由權利譯述」であった。また、同時に神官に向けて「皇朝禊規則」を指導した。これは慥齋が書いた大祓（六月祓）の理念を示すものであった。六月祓は、反対意見があつて廃止されそうになったが、結局高知藩において実現された。慥齋は明治3年に東京に出て、神祇官に奉職し、福羽美静、フルベッキらと交わつた。「皇朝禊規則」は福羽の承認を経たものであった。また、慥齋は、フルベッキに質問し交流した結果、自らが書いた「皇朝禊規則」に彼の跋文を載せた。

**第2章**では、明治3年12月に高知藩で布告された「人民平均の理」諭告の草稿は、慥齋が書いたことを明らかにした。これは今まで誰にも指摘されていない。そこに至る経過には、板垣退助との親密な協力関係があつたことを、慥齋の日記や他の史料を追うことによって明らか

にした。慥齋は板垣によって藩政改革に参画することを要請されたのであった。

次に、「人民平均の理」論告の草稿は、慥齋が書いたばかりでなく、慥齋の考え（思想）が色濃く現れたものであったことを示した。それは慥齋のいう「靈魂」であり、「人民平均の理」論告には「靈妙の天性」と書かれ、「諭俗 人間靈魂自由権利譯述」には「天性本心」「靈魂」と書かれている。それらは共通のものであり「仏性」と解釈できる、人間の本質的な立場に立った考えである。「人民平均の理」論告に書かれている自由は、慥齋の「靈魂」の考えに基づいた「靈魂自由論」であったのである。慥齋は「皇朝禊規則」の中にある「悔過自新（改過自新）」という語を重要視した。これはフルベッキも認めるところとなり、神道とキリスト教の新たな共通性の認識をもった。なお且つ、これは、もともと儒学で使われる言葉であり、慥齋の「靈魂（仏性）」に通ずる道であることを考えれば、神・儒・仏・耶に通ずることになる。「悔過自新」は「靈魂」に至る道であり、慥齋の「靈魂」は、「皇朝禊規則」に使われた、飽くまで伝統的な考えであると同時に、神・儒・仏・耶に通ずる普遍的な理念である。

**第3章**では、慥齋は高知県になって学校改革にも携わったことを考察した。慶応義塾から派遣された洋学家、小林雄七郎との議論が記されている「縣学議案」という史料を基に、慥齋の考えと小林の考えを対比した。慥齋の考えは、漢学皇学の欠点を見直して、新しく科目を設定し、基本的な倫理観、道德観を失わないという考えであった。小林は、開国時代における世界一般の知識教養を基本に据えるべきであるという考えであった。両者の違いは我が国の教育において本質的な問題をも垣間見るようにも思える。

## **第2部「奥宮慥齋と教部省」**

**第4章**では、教部省における慥齋の改革を明らかにした。第2章において、高知で行われた大祓を簡易に行う「皇朝身滌規則」は慥齋が明治3年に出京した際、福羽美静と打ち合わせたものであったことを示したが、第4章では、慥齋の教部省に奉職後、明治5年6月に府県に達せられた大祓復活は、慥齋が、福羽美静の依頼によってその実現に尽力したものであったことを明らかにした。慥齋は、福羽が失脚した後を託されて大祓復活を推進した。今まで、明治5年の大祓復活の詳細は不明であり、慥齋が深く関わっていたことは今まで知られていない。その後、大祓は明治8年4月13日式部寮達として「神社祭祀」の中に制定され、大正3年3月27日内務省訓令第四号に「官国幣社以下神社遥拝及大祓次第」として遥拝次第と共に大祓次第が制定された。大祓復活は成立し継続され、慥齋の意図は成就されたとみるべきであろう。

また、慥齋の教部省における改革、即ち、吉見幸和の神道論を取り入れるよう要請した提言は、受け入れられなかったが、慥齋が最も力をいれたものであったと思われる。慥齋が「振古ノ真神道」と呼んだこのような神道を提案していたことは、結局は失敗に終わった大教宣布運動において、過去の勝れた神道を見出した点において、重要な意味があると言えないだろうか。

**第5章**では、慥齋の長崎出張において、慥齋の長崎での大教宣布活動を紹介すると共に、信教の自由、高札撤去という差し迫った問題に対する慥齋の理解を紹介した。慥齋は明治5年以来、信教の自由を前提とした考えを表明していたが、「議按」第一項目に見るように、神道による国権の確立が急務であると考えていた。長崎滞在中、高札撤去による混乱を目の当たりにし

てみれば、信教の自由の考えは直ちに禁教解除に結びつくものではなく、むしろ慎重だったと考えられるのであるが、「日新真事誌」に書かれた岩倉の言葉「交際ノ今日」「帝国ノ大利」および「最良ノ（クリスタン）宗」の考えを深く理解し、キリスト教の導入即ち禁教の解除に賛意を表したのである。

### 第3部「奥宮慥齋と禅」

第6章では、まず慥齋の思想形成には佐藤一斎が重要な役割を果し、24歳の時に省悟の経験を持ったことが大きかったことを示した。この省悟の経験の後に書かれ、生涯に渡って推敲した「聖学問要」には「聖人学、易簡直截」と書き、そこに至る過程を「頭の頂きから足のつま先に至るまで通身是れ一大疑団となり」また「この疑団を打破し、軽快で自主自由の別世界となり」と言うなど、具体的な経験を基にして書かれていることが分かる。慥齋はこの経験を「見性」としており、この獲得した真理は禅と儒学の根底が同一であることを示している。慥齋はこのような経験の土台の上で弟子に接していた。安政4年の弟子名簿を見ると、土佐勤王党や戊辰戦争に参加したの多いことが分かる。

自由民権家との関係でいえば、板垣退助との関係は、慥齋が「人民平均の理」論告の草稿を書いたように、明治3年から4年にかけての藩政改革で共に行動を同じくしたことが大きいであろう。明治5年、慥齋が教部省に奉職してからも良好な関係が続いた。慥齋が愛国公党に加盟し、民撰議院設立建白書提出の集会に参加したのは、板垣との関係が大きかったからであろう。

板垣は自由民権運動の指導者として長年この運動に携わってきた。『自由党史』（板垣退助監修）や、立憲政体を論じた「我国憲政ノ由来」（『明治憲政経済史論』、有斐閣書房、1919年）、また国家のあるべき姿を論じた『立国の大本』（1919年）で、板垣が自由民権を語るときは必ず、この「人民平均の理」論告全文を引用している。その論告にある考えは慥齋の「靈妙の天性」に基づく靈魂自由論であったとすれば、慥齋の板垣に対する影響は大であったと言わなければならない。

板垣と谷干城との一代華族についての論争において、板垣は、「民撰議院設立建白書」や「愛国公党本誓」においてもルソーやスペンサーの影響を受けていないと主張した。その理由は、板垣が不誠実であったのではなく、高知藩大参事として発した「人民平均の理」論告にある考え、および解釈は慥齋と同じものであったからである。即ちその中にある「靈妙の天性」＝「靈魂」は、神・儒・仏に通ずる普遍的な考えであり、且つ、近代西洋思想の立場には立っていないからである。板垣が、四民平等を説いた理由を「一時の直覚的觀念」と言ったことはこのようなことを意味するのである。

次に中江兆民は自由民権運動の理論的指導者として名高い。従来、兆民が慥齋について陽明学を学び、陽明学者となったことは否定されている。ここでは兆民は慥齋から陽明学を学び、禅の影響を受けたことを示した。兆民は、慥齋の主催する「両忘会」に参加すると同時に、今北洪川に参禅した。その頃、兆民が熱心に摂心会（集中して行なう坐禅修行）に参加していたことは、慥齋の家族宛書簡に書かれている。兆民は洪川に参禅した後、勝峰大徹について禅の

修行をした。著書を見ても兆民における禅の影響は明らかである。

島本仲道は、政府高官となった後、板垣退助らと自由民権運動に挺身した。若い頃、間崎滄浪や大井魚隠、安井息軒に師事し、更に土佐勤王党にも参画したが、その頃、慥斎にも師事していたことが判明した。島本は、大塩平八郎の考えに傾倒し、社会と戦い続けた精神の底流にあったものは陽明学であったが、慥斎の影響も少なくなかったのではないかと考えられる。

その他、慥斎と親交のあった友人弟子の一覧、安政4年の弟子名簿、また明治以降の日記を基にして、慥斎に出入りしていた弟子の一覧を付し、慥斎には常に多くの弟子が出入りしていたことを示した。

**第7章**では、改めて慥斎の生涯における、禅の修行の経過をたどった。慥斎は佐藤一斎に学んで高知に戻った後、大休和尚との交流によって省悟の経験を持つに至った。大坂で医業を営んでいた、在家禅者、春日載陽とは20年間の文通を経て、44歳の時初めて面会し感激を持った。載陽の紹介を経て、神戸の禅僧、匡道慧潭を紹介され、折を見つけて訪問し教えを乞うた。匡道からは「暮雲遠山」という語の書を贈られ、慥斎はその語について工夫した。また、時期は不明であるが、相国寺の禅僧、荻野独園との交流もあったようだ。慥斎の禅において最も重要な出来事は今北洪川との出会いであった。それは、慥斎が明治7年、教部省官員として西国地方8県を巡回して大教宣布を推進していたとき、岩国中教院においてであった。そこで慥斎は洪川の著書『禅海一瀾』を見て、その内容を高く評価し出版を薦めた。その後、慥斎は東京で洪川と再開し、洪川を盟主として上野麟祥院に禅結社、両忘社（両忘会）を設立した。「会約」は「明教新誌」209号に掲載され、一般にも呼びかけられた集まりであった。その「会約」には入社の際には会員を介して盟主に告げること、言論を縦横にすることは随意であることなどが決められていた。この会に集まった人物には、慥斎の弟暁峰、次女鶴の夫である田内逸雄や弟子の中江兆民が居り、慥斎に近い人物が多いことから、改めて主催者は慥斎であることが分かる。その他にも優れた人物が多く、漢詩人では小野湖山、大沼枕山、また盲目の詩文家、棚橋松村、また幕府大目付から名古屋県大参事を勤め、横浜毎日新聞主筆を経て、文部省に奉職した、妻木栖碧、僧侶では後に東福寺管長となった済門文幢がいる。更に重要な点は後の在家仏教運動に関わった人物が3名いたことである。その3名とは、鳥尾小弥太（得庵）、大内青巒、山岡鉄舟である。

鳥尾小弥太は、護国、仏法、安心立命、四恩などを骨子として明治17年1月、明道協会（護国協会を改名）を設立した。この明道協会には、山岡鉄舟、大内青巒、今北洪川が関わっている。鉄舟は副会長となり、青巒は庶務幹事に名を連ねている。青巒が主催する「明教新誌」は「明道協会録事」の欄をつくり継続的に記事を載せている。洪川は碧巖録の提唱もし、入室参禅も受けていた。支援者は他にもいたが、明道協会にとってこの3名の協力は大きいと言える。

大内青巒は、居士として在家主義の仏教を主張し、社会福祉活動にも従事した。明治8年仏教新聞「明教新誌」を発行し、啓蒙思想家として幅広い活動を行い、仏教思想普及のため尚和会、和敬会を起し、また尊王奉仏大同団を結成した。ついで曹洞宗扶宗会を起し、そこで大衆教化の為、『洞上在家修証義』を草し、曹洞宗在家教化の標準を確立したことは今日にも影

響を及ぼすものである。

山岡鉄舟は、剣においては久須美閑適齋に真影流を学び、後井上清虎の門に入り、北辰一刀流を研鑽した。猶一刀流正伝を極めんと欲し、浅利義明に随学数十年、遂に開眼し、剣禅一如の一刀流を開いた。鉄舟は公務の傍ら、剣道場を経営し、剣禅一如の立場に立って多くの弟子を養成し、深い感化を及ぼした。社会公益事業に、教育事業に、災厄救助に協力し、各宗の慈善事業、各宗寺院の復興、国泰寺や鉄舟寺の復興、また全生庵の建立にも尽力した。

この3名の在家仏教の振興活動の間に協力関係が見られることは、その基礎に明治8、9年を中心に開かれた両忘会の関係が、なんらかの役割を果たしていたのではないかと考えられる。

慥齋が明治8年禅に打ち込むようになった時、家族も殆ど禅を修するようになった。特に次女鶴は熱心に撰心会に参加したことは慥齋も驚くほどであった。

明治10年9月洪川が鎌倉の円覚寺に移ったので、両忘会を含む、上野麟祥院で修行していた在家者は円覚寺の居士林で修行するようになり、多くの若者が来て禅を学びに来るようになって、居士禅が発展した。その中には夏目漱石や鈴木大拙もいた。鈴木大拙によって禅が世界に知られるようになったが、その遠因はといえば、洪川と慥齋の出会いによって始まった両忘会にあったのである。

### 3 結論

本論文では、慥齋の明治以降の事績、およびその考え（思想）について検討した。慥齋について研究した中でいくつかの発見があるが、その第1は、「人民平均の理」諭告の草稿は慥齋が書いたことである。この史料は高知市民図書館平尾文庫にあるが、平尾道雄氏も気が付いていなかった。当時、慥齋は、大参事であった板垣退助と親しい関係があり、藩政改革に深く関わった結果成されたものである。第2は、明治5年の府県に達した大祓復活について推進したことである。明治3年に高知藩で6月祓を導入させた経験が役立ったことは疑いがない。第3は、慥齋の考え（思想）は天保5年3月16日の見性経験以来、生涯に亘って一貫していることである。「人民平均の理」諭告では「靈妙の天性」といい、「諭俗 人間靈魂自由権利譯述」では「靈魂」、「天性本心」といったことは、表現の違いこそあれ、見性経験の内実を表すものに他ならない。更には自由平等の解釈は学校改革、神道改革においても背景には、一貫したこの精神、即ち「靈魂」があったことは疑いがない。

ここで見方を変えて、慥齋の提起した問題は伝統の継承であったことを指摘するため、後に道德の必要性を訴えて運動を起こした西村茂樹（1828-1902）と比較してみる。道德思想家、西村茂樹は、明治5年8月に頒布された学制の序文を読んで「一も仁義忠孝を教ふるの語なし」と言った。もとより明治5年の学制発布は我国の近代化教育の出発点として重要なものであることはいうまでもない。しかし、それは西村の言うように、伝統を否定した所に構築したものであった。西村が根本に置いたのは、「天地ノ真理是ナリ」と言っている「真理」であった。その「真理」とは「儒道ニ言フ所ノ誠」であるとして、『中庸』の「誠ハ天之道也」を引用し重要視している。西村の優れている点は、西洋思想の流入に際しても、東洋思想の優れた面に

立脚して伝統を放棄しなかったことにある。西村が、この中庸の「誠は天の道也」を重要視したことは、その根本精神において東西を公平に見る中にも伝統に立脚した意識を感じさせる。

一方慥齋においては、西村と「中庸」の精神において一致している。即ち伝統の優れた精神を保持している点において共通である。しかし、慥齋が西村と違う点は3つ考えられる。1つ目は、神道に通じ、高知藩諭俗司から神祇官、教部省に移り神道行政に関わり、積極的に変革しようとしたことである。2つ目は、神道の解釈の可能性を提示したことである。「神道即王道、王道即神道」であるような吉見幸和の实事神道を提唱したことである。慥齋は今までの「記・紀」を「幽渺荒誕」なもの扱うのではなく、実事と解釈することによってより西洋思想に対応出来るものと考えた。これは結局政府に受け入れられなかったが、神道解釈の変化を齎す可能性があった。3つ目は、慥齋は霊性的直覚を持っていたことである。これは先ほどの見性経験が基になるものである。この霊性的直覚によって神・儒・仏の本質を捉え、更にはキリスト教にも同質の普遍性を見出したのであった。慥齋の強調した「悔過自新」は霊性的直覚に至る道であると同時に、神・儒・仏・耶の四教に通ずる道であったのである。

これら三つの点は、慥齋が「靈魂」や「悔過自新」という語を使っている以上伝統的なものであり、それが即ち普遍性を持つものである。慥齋の価値は、激動の明治初期において西洋思想流入に際して、それに呑みこまれることなく、自らの足元を自覚し、伝統を踏まえた認識の深さにあったのではないだろうか。

ここで改めて、慥齋の独自性はどこにあるか、について考える。それは、第二章で述べた「人民平均の理」諭告、および「諭俗 靈魂自由権利譯述」における「靈魂自由論」である。

慥齋の独自性は次の3点に纏められる。まず第1に、西洋近代思想の基本である「自由」、「平等」を、人間存在の「靈魂」を基に解釈したことである。第2には、慥齋の「靈魂」に基づく自由論は、抽象的な議論に終わったのではなく、現実政治に応用されたことである。高知藩において、明治3年12月に発せられた「諭告」は、板垣退助、福岡孝弟を中心に成された改革の基本理念であった。第3は、慥齋の「靈魂自由論」が、「自由」の概念を神・儒・仏の考えを基に解釈したことによって、その思想が過去の伝統と連続している点である。慥齋が「靈魂自由論」を主張したことは、「自由」を外來思想としてではなく、神・儒・仏の伝統的な立場に立ち、過去の思想と連続しているという意味において、慥齋の独自性を示す価値を持ったものであると言って間違いないであろう。

#### 4 これからの課題

慥齋研究のこれからの課題の一つとして江藤新平との関係を挙げよう。

慥齋は教部省設立当初、江藤新平との議論を欲して訪問したが不在だった。慥齋は江藤と、教部省の考えについて強く議論を欲していたことを示している。江藤は伝統を継承するという大筋については慥齋と同じであるが、文部、教部両省について考えの違う点も見られる。また江藤が、福羽美静と共に神宮遷座・天皇親祭という強固な祭政一致体制を求めていたことも慥齋には見られない。果たして慥齋の「王道即神道」論は江藤に受け入れられるものであったのか

どうか興味のあるところである。慥齋と江藤とは、明治7年の民撰議院設立の会合では同席している筈であるが、互いの関係はこれ以上分からず今後の研究課題である。本研究は明治時代を中心にしたので、当然ながらそれ以前の研究は不足している。また、明治になってから慥齋は木戸孝允、勝海舟なども訪問しており、西郷南洲（隆盛）とも面会していてそれらの人物との関係を明らかにするのはこれからの課題である。